

1830年代フランスにおけるショパンの変奏作品のレビュー
—「芸術音楽」理念の普及の場としての文化史的意義について—
塚田花恵

楽譜出版者のモーリス・シュレザンジェが1834年に創刊した音楽雑誌『ガゼット・ミュージカル・ド・パリ』（以下『ガゼット』）では、彼が出版するショパンの変奏作品（Opp. 2, 12, 13 & 14）が、「大衆」には理解しえない音楽として高く評価された。本論文は、これらの変奏作品とそのレビューが音楽文化史において有する意義について、考察するものである。

本論文では、1830年代のフランスの音楽雑誌を調査した結果から、『ピアニスト』誌が一部のショパン作品について批判的なレビューを掲載し、『ガゼット』誌はそれに対する反論として、ショパンの変奏作品を「識者」にのみ理解し得るものと称賛したことを、明らかにした。その際に、芸術家向けの雑誌とされている『ガゼット』誌が、敢えて変奏作品というポピュラーなジャンルの作品を選択した理由は、広くピアノ愛好家をレビューの読者として獲得する狙いがあったためと考えられる。

『ガゼット』誌の中でショパンの変奏作品のレビューは、「芸術音楽」のあり方、すなわち、流行音楽とは異なり、古典作品に繋がるものであるという理念を、ピアノ愛好家に伝える場として機能した。それらのレビューにおいて、批評家はショパン作品について、型に嵌ったヴィルトゥオーソ的な変奏曲との差異を強調し、その作品全体の一貫性を高く評価したのである。このような評価の背景には、音楽作品を作曲家の精神の顕現と捉える器楽観を見ることができる。これらのレビューが1830年代フランスのピアノ作品レビューに影響を与えたことは、掲載後に『ピアニスト』誌のショパン作品の評価に変化が現れたことから明らかである。ショパンの変奏作品とそのレビューは、フランスにおける「芸術音楽」の理念の普及において、重要な役割を果たしたと言える。